



いっぺいといっぶん Vol.42



市長は長久手をどんなまちにしたいか、そのために何に取り組もうとしているのか。その想いを市長の語り口でお伝えします。
みなさんと語り合うように、一緒に未来の長久手のことを考えてみましょう。
また、市HP【にやげがもん】もぜひご覧ください。
[市HPのトップページから【にやげがもん】をクリック。]



経験が「ふるさと」をつくる

いといがわし
年末に新潟県糸魚川市で大火がありました。4万㎡が焼けるという大きな被害が出た一方で、幸いに死者はゼロでした。死者が出なかった理由として、報道では、古くから「南風が強いときは火事に気をつけろ」という言い伝えがあったこと、ご近所が顔見知りであったため、互いに声を掛け合い、早めに避難が行われたことなどが挙げられています。

もし、本市で同じような大火があった場合、住民同士、声を掛け合って避難することはできるでしょうか。

本市の人口は、昭和44(1969)年に1万人、昭和57(1982)年に2万人、平成元(1989)年に3万人を超え、現在、約5万7千人となりました。この50年弱の間に、一気に4万人も人口が増えました。その多くが、市外から長久手に引っ越してきた方々です。

歴史ある「古戦場のまち」ではありますが、今の長久手は、人が寄り集まっただけであり、暮らしの場としての「まち」の歴史は浅いと私は感じています。

日本の自治体の約8割で、人口減少が始まっていますが、そうした自治体の多くは、暮らしの場としての「まち」の歴史があり、以前から住民同士の支え合いがあります。

一方、本市では、ご近所同士のあいさつや声掛けも、まだまだ十分とは言えません。今から始めても、糸魚川市のような支え合いができるようになるには、10年、20年とかかります。しかし、今から始めれば、子ども達が大人になったとき、互いが支えあえる歴史ある「まち」になれるのです。

先日、中学3年生と意見交換をする機会がありました。みんな真剣に長久手のことを考えていました。子ども達は、自分でまちをよくする経験、「まち」をつくる経験をしたことがあれば、東京などに進学や就職しても、いずれ必ず長久手に戻って来ます。そうした経験が「ふるさと」をつくるのです。でも、今の長久手には、それがありません。

私たち大人達は、「自分達でまちをつくるなんて、わずらわしいことはやらない」と済ますのではなく、今こそ、次の世代のために、苦労してでも「まち」をつくっていくことが必要なのです。



長久手中学校での意見交換の様子



表紙の写真もう一枚



ながくて冬まつり(市観光交流協会主催)の企画として行われた「光の王国」。光の切り絵作家の酒井敦美さんの協力のもと、クリスマス为主题にした切り絵を壁や天井に投影。子どもたちがつくった紙袋とLEDキャンドルの灯籠も設置。来場者は光の世界に夢中になっていました。

